あなたに逢いたくて

ひとみ夕凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あなたに逢いたくて

【Ｎコード】
Ｎ３８３４Ｄ

【作者名】
ひとみ夕凪

【あらすじ】
セピア掛かった少年時代、思い出の中の女性（ヒト）が実は…だった！

第1話

昭和五十年八月七日・夏休み…。

例年にない猛暑のせいか、巷では日々鉄板で焼かれボヤく魚の悲痛な歌が大流行していた。

『まいにちまいにちぼくらはてっぱんの…』

「鉄板の上で焼かれちゃうよ！」

少年は「ちゃんと靴を履いて行きなさい」という母親の警告を無視してビーチサンダルで来た事を後悔しながら、そんな事をつぶやいていた。既に少年の足元のひび割れたアスファルトは容赦のない太陽熱に溶かされ粘つき、歩きにくい事この上ない。

しかも育ち盛りの少年の足の指は昨年買ったビーチサンダルから大きくはみ出し、歩くたびに直に焼けたアスファルトに触れる。

「やんなっちゃうなぁ・・・」

少年の名前は佐山修吾（さやましゅうご）。

修吾の住む町は、戦後のヤミ市から発展した都下中の都下にあり、荒っぽく、それでいて人情の厚い人が多い。そんな田舎町で中華料理店を営む父親を持つ修吾は、小学校の給食の一品を父親が担当している事が唯一自慢の、今年１０歳になるヤンチャ盛りであった。

野球帽に横文字のロゴ入りＴシャツ、半ズボンに問題のビーチサンダルという、この頃のヤンチャ小学生定番ファッション。余談だが野球帽のチーム名およびロゴ入りＴシャツのロゴに関しては、ただソレが存在している事のみ重要であり、チーム名及びロゴのもつ意味合い、思想等はさして重要ではなかった。つまり横文字であれば何でも良いのである。

目指すは、近所に住んでる寿司屋のセガレで飲食店を父に持つ繋が

りで家族ぐるみの付き合いのある同級生の敦(あつし)の家だ。通称は「あっちゃん」「あーぼー」「あつ」等その日の気分によって様々に変化する。
「あっちゃん、あーそーぼ！」今日は「あっちゃん」でいく。
修吾は、足元に横たわっているローラースルーゴーゴーを足で蹴飛ばしながら、いつものように声をかけると同時に、すりガラスが入った格子戸を開け、中をのぞく。
何が不満なのか、眉間に深いしわを寄せとびきり苦い苦虫を噛み潰した上に舌の上で味わって堪能しているかのような顔をしたあっちゃんのおふくろさんが、木製の安楽椅子に深く腰掛け、テレビを睨み付けている。少し顔を傾け修吾に照準を合わせる。
修吾はその視線を巧みにかわして、当時の子供特有のアゴを突き出すスタイルの会釈をしながら、あっちゃんのおふくろさん越しに室内の奥をのぞく。
あっちゃんのおふくろさんは二・三秒修吾の顔を睨み付けていたが、また興味なさそうにＴＶに視線を落とす。別にあっちゃんのおふくろさんは性格が悪かったり、修吾を忌み嫌っていたり、ましてや過去に人を獲って喰らっていた訳ではない。これからも人を獲って喰らう事もないだろう。そういう顔なのだ。むしろ細かい事に良く気が付き、無口だが性根の穏やかな度量の深い女性だ。しかし、幼いころから見慣れた修吾ですら、暗がりで突然遭遇したりすると思わず「ごめんなさい！」と叫びたくなる。
間もなく、あっちゃんが奥の座敷から顔だけ出す。

修吾が息を切らせながら、
「エッチャンバヤシ！」
と言うと、待ってましたとばかりに、
「うん！ちょい待ち！」
あっちゃんは、寿司屋の親父の影響からか江戸っ子風にそう言うと、一旦奥に引っ込み、右手には虫採り網、左手に虫カゴをぶら下げて

出てきた。
『エッチャンバヤシ』とは、自転車で十分程町外れに走った未だに整備もされてなければ、特に深いというわけでもない林。つまり少し前ならどこの町にでもあった、裏山的な存在の場所だ。
そして有名なクワガタ採りポイントでもある。
その名の由来にはいくつかの仮説があるが、取るに足らぬ寓話がほとんどであり、信憑性に欠けるものばかりで、結局未だ不明のままである。
二人は、当時流行っていたヘッドランプが2個付いた五段変速ギアーの自転車にそれぞれ飛び乗った。荷台部分には、跨がせるタイプの黒いツーリングバッグを装備したヤツだ。股の部分に付いている変速レバーを得意げに操り、我先にとエッチャンバヤシに向かった。
修吾は、自転車を転がす道すがら、
「ノコ（ノコギリクワガタの呼び名）いるかな？」
「うん、いればいいよね。この前はブーチャン（クワガタのメスの呼び名）しかいなかったしね。」
そんなとりとめもない事を話しながら、民家もまばらになってきた細い路地をブレーキもかけずに勢いよく曲がって行く。
その路地を曲がればエッチャンバヤシは、もうすぐだ！
生い茂るクヌギの木は、夏の強い日差しを遮り、秘かに木漏れ日が差し込んでいる。
ひんやりとした細い林道を更に奥へ奥へと入ってゆく。
二人は、揃って左前方に視線を向ける。
その視線の先には、後ろの景色を隠してしまうほど太く大きな年老いた大木がいた。
そして二人は、ほとんど同時に急ブレーキをかける。
自転車を止めると一瞬あたりは静寂に包まれる。しばらく放心したかのように林の声に耳を奪われる。その一瞬が修吾は好きだ。
気がつくと普段のせみの声や木々のざわめきが当たり前になってくる。

エッチャンバヤシの中でも、ノコギリクワガタの目撃情報が圧倒的に多い「おんじクヌギ」が風に音を立て、二人の前にその全貌を表した。
その大きな木はどことなく頑固なじいさんみたいなイメージがあり、誰が付けたか、アルプスの少女ハイジに出てくる「アルムおんじ」から取って付けた呼び名である。
二人は、ワクワクしながらおんじクヌギを見上げた。
目が良く、すばしっこい修吾は早速ノコを見つけた！
遥か木の上、下を見れば眼のくら眩むような高い場所にソレはいた。
「あっ！！ノコだ！！」
修吾は、ヒョイヒョイと身軽に木を登ると素手でノコを捕まえた！
そしてまた、身軽にスルスルっと降りてきた修吾は得意げに、捕まえたノコをあっちゃんの鼻っ面まで持っていき見せつけた。
「ほら～！」
「・・・ホントだ・・・いいなぁ・・・。」
修吾に先を越されたあっちゃんは、ちょっと悔しそうに、ちょっと羨ましそうに、そうつぶやいた。
そして少しうな垂れながらおんじクヌギの木の根元を掘り始めた。
「・・・いた。」
あっちゃんが見つけたのはブーチャン。
そう、見た目が貧弱なハサミが小さいメスのクワガタである。
実はあっちゃん、イマイチ意気地なしで高い木に登れないのである。
「よかったじゃん・・・」
修吾は、木に登れないあっちゃんに不びんさを感じながら、引きつった作り笑顔でそう言った。
薄暗くなるまでエッチャンバヤシを堪能し、それぞれクワガタをゲットした二人は家路を急いだ。
林道は来るときとは違い、日が傾き始めると、ライトを点けなければ先が見えないほどになる。
少し錆びたペダルと油が切れかけたチェーンの音、そしてそこにダ

イナモの回る音が重なり、木々に反射して響き渡る。
「遅くなっちゃったね・・・。」
あっちゃんのおふくろさんはしつけに厳しい。そのことをよく知っている修吾は、あっちゃんを気遣うように言った。
「・・・うん、早く帰ろ。」
ちょっとビビリが入ったあっちゃんのその返事を聞くと修吾は自転車のスピードを上げた。
幼なじみで同級生の二人は、普段からライバル心むき出しである。修吾がスピードを上げたことで、あっちゃんも負けじとスピードを上げる。
そして、気が付けば二人とも鼻息を荒げ、口を尖らせいつも競輪状態・・・。
すっかり競走に夢中になっている二人の先には真っ赤な夕日が「子供たちはもう帰宅の時間だ。」と言わんばかりに正面から二人を照らし、逆光となって視界を遮る。
その刹那、逆光で視界を奪われていた修吾の面前に人影が飛び出す！
「あっ！！」
人影に気づいて思い切り両手で急ブレーキをかけ、反射神経のよい修吾はその人影を間一髪で避けるが、道の脇に転倒しそうになり、かろうじてひざを着き状態を保つ。
その人影の主に怒られると思いながら、そうっと振り返る修吾・・・。

　そこには童話で見る女神がいた。
一瞬あっけに取られる・・この田舎町の一角にそれはあまりにも不釣合いな組み合わせであり、少年の修吾にとってあまりにも非日常的な光景だった。
「どうした？少年！」
少年はその言葉でやっと放心状態を脱し、目の前の女神を女性として認識した。
そこには白いワンピース姿の、年のころ二十代半ばとみられる美し

い女性が立っていた。
「そんなに飛ばすと危ないよ。」その女性は修吾に優しく微笑みながら声をかける。
修吾は、まだ夢うつつ覚めやらぬ状態で綺麗なおねえさんに見とれたが、ハッと我に返り、
「ご、ごめん・・・なさい・・・。」
と、恥ずかしそうに照れながら謝る。女性はまた優しく微笑むと、
「ううん、私は大丈夫。でも、今度からはスピード出しすぎでケガしないように、安全運転でね。気を付けてお家に帰るのよ。じゃあ・・・・」
女性はくるりと向きを変えると、修吾たちが来た道に2歩3歩とあるきはじめた。修吾は何か言わなければととっさに思う。
なにを言えばいいのだろうか？ごめんなさい・・？いや違う・・もっとなにか・・
そのとき女性はもう一度振り向き、まるでクラスメートが下校時に交わす何気ない言葉のように
「・・・またね」
とさり気なく言うと、夕闇の中に吸い込まれ吸い込まれるようにゆっくりと消えていった。
修吾はこの時以来、この女性の夢を見るようになった。

それはいつも薄ぼんやりと、時にはただ黙って修吾を見つめていたり、恋人同士のように話し合っているときも有り、また、不定形な出演ではあったが、いつも優しく微笑んでいた。

平成二年七月二十八日・夏・・・。
ＩＴ関連の会社に勤める修吾は、会社の外回りで、たまたま故郷の地を歩いていた。

第2話

すっかり様変わりし、高いビルやマンションが立ち並ぶ街並に少しがっかりた様子で見回しながら得意先の会社を目指した。
三十分は歩いただろうか・・・、昔とほとんど変わらない懐かしい風景が目に飛び込んできた。
「うわぁ・・・懐かしいな・・・この辺は全然変わってないんだな。」
修吾は、その日既に何度も汗を吸っているタオル地のハンカチで額の汗をぬぐいながら、その風景を前に少年時代を思い出していた。
そんな修吾の視線の先に、昔見慣れたあの景色があった。
「あれ・・・？たしか・・・あそこを曲がると・・・。」
修吾は得意先回りのことなどすっかり飛んでしまい、その道の方向へあの少年の日のように走り出した。
未だ当時のままで、ひび割れたアスファルトが敷かれた細い路地を曲がり、そして立ち止まった。
「やっぱり！」
そうつぶやいた修吾の目の前には、あの懐かしい林道への入口が広がっていた。
「昔のまんまじゃん！全然変わってない！」
修吾は、そう言いながらそのまま思い出のエッチャンバヤシの方へと歩き出した。
はやる気持ちを抑えながら、一歩進むごとに当時へタイムスリップしていくかのように林道の奥へ奥へと吸い込まれていった・・・。
林道の両側は以前と変わらず木々の隙間から木漏れ日が差し込むひんやりとした林だった。
修吾は、はやる気持ちを抑えきれず歩調を速める・・・。
するとそこへ、遥か昔誇り高きノコハンターの称号を与えてくれたあの「林の主」が、あの時と同じように威風堂々とした姿を表して

くれた。
「おおお！おんじクヌギだぁ！もう無いかと思った！」
修吾は、抱きつき両手で擦りながら、大きな父親を見上げる子供のようにおんじクヌギを見上げた。
ここは夏でも日を遮り、ひんやりとしている。
「・・・はぁ、涼しい・・・。」
そうつぶやきながら修吾は、おんじクヌギにゆっくりと背を預け、目を閉じた。
「・・・よくここにあっちゃんとクワガタを採りに来たっけなぁ。行き帰りでよく自転車で競争したりしてな・・・。二人ともムキんなっちゃってさ。スピード出し過ぎて、人にぶつかりそうになったりした事もあったよな・・・。」
修吾は少年時代の懐かしい記憶を辿っていくうちに、何度も夢の中に出てきた女性のことをまた思い出していた。
「そう言えば、あの時のおねえさん・・・すごく綺麗なひと女性だったよな。元気なのかな・・・この辺の人なのかな・・・あの当時であの感じだから・・・もうおばさんかぁ」
しかし、その記憶はおぼろげであり、覚えているのはただ綺麗な女性だったということくらいである。
「んー・・・やっぱり顔はハッキリ思い出せないな・・・。そう言えば別れ際にまたねって言ってたのに、結局あの時以来一度も逢えなかったもんな・・・。」
修吾は、そのおねえさんの言った「またね」という言葉が強く印象に残っていて、あっちゃんには内緒であの坂道にお姉さん参りに来たことがあったのだ。

そんな当時を思い出しため息をつきながら、ふと腕時計に目をやると午後2時を回っていた。
「あっ！やっぱー！もうこんな時間じゃん！！急がなきゃ！」
すっかり懐かしい思い出に浸っていると、心無い腕時計に一瞬で現

実へと引き戻された修吾は慌てて得意先へと向かった。
そして修吾の体力を根こそぎ奪い取った太陽が沈みかけた頃、慣れない得意先回りを終え帰社した。

「戻りましたぁ。お疲れ様っす！」
修吾が疲れた顔をして会社へ戻ると、同僚の滋(しげる)が声をかけてきた。
「おつかれ！お前今日得意先へ直行だったからまだ会ってないよな？」
滋はそう言うと、ニヤニヤしながら肩を組んできた。
「ん？何を？」
修吾が疲れたぶっちょう面で訊くと滋は、
「今朝、人事異動でさ。今日付けで葛飾営業所から異動して来た彼女だよっ！」
と修吾の首を絞めながら言った。
「く、苦しいっつうの！今日は久々に外回りしたからさぁ、疲れてんだって。人事のことなんかどうでもいいっつうの・・・。」
気のない返事をする修吾に、
「うひゃひゃ、彼女を見てないからそんなこと言うんだよ。あそこ見てみな。ほら、先月「寿(ことぶき)」した板垣さんのデスク。」
修吾が滋の言う方に、面倒くさそうに流し目気味に目を向けると、そこには、おめめぱっちり！色白で！すっきりお鼻に！可愛いお口！誰が見ても１００パーセント落としたくなる容姿端麗の女性が座っていた。
「なっ！いいだろ？すっげーイイ女だろ？これから彼女の歓迎会だ。けど、修吾は疲れてるんだよな？残念だなぁ。がっはっはっは！」
滋は、修吾の背中をバシバシ叩きながらそう言った。
すると修吾は目を爛々とさせて、
「マジ？あのコの歓迎会？っつうか、疲れたなんて言ってる場合じゃないっしょ！」

と、態度を急変させた。
「なんだそりゃ？信じらんねー・・・疲れてる時は口もきかねーで帰っちゃう上に飲み会にも一切顔出さねーヤツが・・・マジ信じらんねー。」
滋にそうイヤミを言われると、
「だって、あんな可愛いコの歓迎会だぜ！親友の結婚パーティーがあったって、そっち蹴って行っちゃうよ。だいいち、今日内勤の連中より一歩出遅れてんだからさ、歓迎会で売り込んどかにゃぁ！」
修吾は滋を突き飛ばし、そう答えた。
　大声でやり取りをするそんな二人を見て、その彼女が少し首をかしげてニッコリ笑っていた。
「おっ、笑ってるよぉ。」
と言いながら、滋はちゃっかりと彼女に手を振っていた。
「おい、ぬけがけ無しだっつうの！」
と修吾は滋の胸に裏拳をしながら言った。

駅前の会社御用達洋風居酒屋『一心亭』・・・。
和と洋がセンス良く調和しているエキゾチックな内装の店だ。中央には、知らない客同志も和気藹々（わきあいあい）と相席するタイプの大きな円卓カウンターがある。・・・が、今日はどうやら修吾たちの会社がこのスペースを借り切っているようだ。
「おーい、早く席に着けよ。主役のあなたはココ！」
滋は彼女の両肩に手をかけ、彼女の席を決めた。
「あとは適当にな。男同士女同士くっついたりしないで男と女交互にな！うん、そうそう。」
いつものように、仕切り屋の滋が大声で皆を指示する。
ほぼ全員が席に着くと、
「さて、本日付けで渋谷営業所に配属となりました・・・『池田めぐみ』さんでーーーす。ヒューーーー！！では、自己紹介をどんぞ！！」

滋が、めぐみの横に付き両手をヒラヒラさせながら言った。
「みなさん、はじめまして、池田めぐみです。葛飾営業所に入社以来3年間いましたが、先月ことぶき寿退社された板垣さんのポストに着く事になり、こちらに配属されました。まだまだ未熟者なので、わからないことは遠慮なくみなさんに質問しながら頑張りたいと思います。どうぞ、宜しくお願いします。」
めぐみは、ハキハキとそう挨拶をした。
仕事もできる超いい女のイメージがバッチリハマる女性である。
「えー、と、言うことで、池田めぐみさんの歓迎会・・・スッタートォー！かんぱーーい！」
滋の乾杯音頭で、乾杯をした。
すると早くも席を立ち、めぐみの周りに男どもが集まって行った。
「ども、宜しくぅ。俺、入社4年目の国井です。みんなには『ヒゲ』と呼ばれてまっす。以後お見知りおきをー」
「どうも、池田さん歓迎しまっす！入社1年目の中村公平っす！池田さんより後輩になりますが、ココでは一応先輩っす！宜しく！」
「出勤一日目、おつかれさまです。疲れたでしょう、渋谷（営業所）は全員が同期のようにやってますんで、気楽に・・・あっ！紹介遅れました、石田です。宜しく。」
　次々と自分を売り込んでいるヤツがいる中、修吾はホントに疲れているのかさっきの勢いが見られない。
「おい、どうしたんだよ。お前も挨拶して来いよ。」
　滋が修吾の腕を引っ張り、めぐみの所までムリヤリ連れて行った。
「あっ、池田さん、コイツ今日一人だけ外回りしてた入社3年目の佐山修吾。俺と同期ね！コイツも俺と一緒でお調子モンだから親しみやすいと思うよ。まっ、見てのとおり俺よかルックスは落ちるけどね、がっはっはっは！」
滋が、余計なお節介で修吾を紹介するとめぐみは、
「今日は外回り、お疲れ様でした。天気予報で今日は今年一番の暑さだって言ってたから大変だったでしょう。私も入社3年目だから

同期ね。宜しくっ！」
と、修吾の目をまっすぐに見つめながら言った。
「ど、ども・・・今コイツが言った通りで・・・ほとんど合ってます。宜しく。」
修吾は再度めぐみのその美しさに見とれた。

第3話

「ううう、かわいいーーー！そんでもって、すっげーアタマもキレそう！そ、そんな目でまっすぐ見つめないでくでぇー。ううう、完全に一目ぼれだぁ！こりゃあ！！」
と、修吾は心の中で叫んだ。
「がははは！コイツ緊張してるよ。ガラにもなく！池田さん、コイツ今こんなシャイ演じてるけど、騙されないでね。コレがコイツの「手」なんだから！がははは！」
滋はそう言って笑い飛ばすと、修吾の背中をバシバシ叩いた。
修吾は叩かれた勢いで、ラッキーなことに自然な形でめぐみの膝の上につんのめることができた。
「ご、ごめん・・・コイツがあんまり強く叩くから・・・ホント・・・ごめん。」
カウンターに手をつき、体制を整えながらめぐみに謝っている修吾の後ろからガッチリと腕を掴んだ滋が、
「お、おいっ！お前、ドサクサまぎれに！なんてことすんだ、お前！そんなに強く叩いてないだろ！！」
と、言いながら触るなと言わんばかりに修吾をめぐみから引き離した。
「ね、ね、見たでしょ？池田さん！コイツ早速さぁ、こんな見え透いた手を使うんだよ。気を付けな！ね、ね！」
滋がそう言うと、めぐみは笑いながら何度も頷いていた。
こんな調子で滋が中心となり大いに盛り上がっためぐみの歓迎会は、終電ギリギリまで続いた。

平成二年八月二日　午後四時四十五分

日本は至上空前の好景気。各企業とも一週間以上の夏期休暇を儲けている。
修吾の会社も例外ではない。

「えー、明日から十三日間の夏期休業に入ります。明けの十六日には、夏休みボケなど無いようにシャキッとした顔で出社してください！では、お疲れさまでした！」
支所長の宅間が言った。
すると、社員達は声を揃えて
「お疲れ様でしたーーっ！」と言うと同時にぞろぞろと席を立ち、そしてガヤガヤとエレベーターに吸い込まれていった。
　ほとんど人が引けたオフィスのデスクでぽつんとしている修吾は、ホッとしながら深いため息をつき、そしてうな垂れた。
「はぁ・・・。」
すると、エレベーターホールに修吾の姿がないのに気付いた滋が人を掻き分け逆行し、オフィスに戻ってきた。そしてニタニタと何か企んでいるかのような笑みを浮かべながら、
「おい～～、な～にうな垂れてんだよ！」
と言った。
夏期休業前の溜まっていた仕事をなんとか片付け終えて、力が抜けていた修吾はゆっくりと顔を上げて気の抜けた声で、
「いやぁ・・・明日から夏休みだなぁと思って・・・。ホッとしてたんだよ。マジ疲れた。ここ2週間位ちょっと頑張り過ぎたからな・・・その合間で滅多に無い外回りまであったしさぁ・・・。」と答えた。
「だよなぁ・・・お前、なんだか最近頑張ってたもんなぁ。いくら頑張ったところで喜ぶのは会社経営者だけだぜ、気楽にいこうや！気楽に！がっはっはっは！」
滋は、いつもの調子で無責任に笑い飛ばした。

滋は支所長の宅間に粗雑な挨拶を済ませると修吾の腕を乱暴に掴み、ぐいぐいと引っ張りながらオフィスを出て、はしゃぎながらエレベーターに乗った。
そして滋が修吾をからかうように覗き込ながら言った。
「お前、仕事で疲れたフリしてるけどさ、ホントは、休み中に池田さんの顔見れないのが寂しくて落ち込んでるとかじゃないの？」
すると修吾は、
「何言ってんだよ、違うってば！マジ仕事で疲れが溜まってんだよ！・・・まっ、明日から夏休みだからゆっくり休むよ。」
とけげんそうな顔をして言うと、滋はすかさずそれにかぶせるように言った。
「おっとー！そうはさせないぜ！海行こう、海！弟に宿を頼んであるんだよ！余裕で取れるらしいぜ！今確認するから降りたらそこで待ってろ！なっ！」
滋の弟は旅行代理店の主任を務めているのだ。
滋はドアが開き切るのも待たずに、こじ開けるように無理矢理エレベーターを降りるとロビーに1台だけ設置されている公衆電話に走った。
しかし夏期休暇の前日であるせいであろう、その公衆電話にはアッシー君出動命令を発令しそうなＯＬ達が行列を作っていた。その光景を見た滋は、かなりイラついた様子で
「ちぇっ！！うっとおしいなぁ・・・おおかたアッシーメッシー野郎に出動命令でも出してるんだろ！甘えた声出しちゃってさっ！」
と、はき捨てるように言うと、修吾の鼻っつらに人差し指を突きつけ
「修吾！ココで3分だけ待ってろ！いいか！絶対に動くんじゃないぞ！わかったな！！」
と言い残して疾矢のごとく外へ飛び出していった。
「な、なんなんだあいつは・・・ったく。」
修吾はさすがに呆れ果てて、付き合いきれないとばかりにロビーを

出ようとした。
・・・が、しかしそこはそれ、クサレ縁というやつで腹を立てながらも、やはり思い直して仕方なくロビーに戻る修吾であった。
先ほどの公衆電話の方からは、相変わらず入れ替わり立ち変わり出動命令を出すＯＬのやりとりが耳に飛び込んでくる。
修吾はロビー中央の中庭が見えるウィンドウに額を着けて、ＯＬのそんなＢＧＭを聞きながら滋が戻るの待った。

中庭の池の水が干上がっている様子に気がつき、水はどこから補給するのか・・・などと、どうでもいいようなことを考えていると・・・
ガタン！！という大きな音と共に聞き慣れた男の大声が耳に入ってきた。
エレベーターの時と同じで、開き切るのを待ち切れない滋が入り口の自動ドアに体当たりしながら叫んでいた。
「おーーーい！！取れたってよ！！宿と飛行機！！！沖縄だぁぁぁぁ！！」
滋は炎天下の中マラソンでもしたかのように汗だくな姿で戻ってくると、修吾に一直線がぶり寄ってきて、くっつくほど顔を近づけ
「明日６時ジャストに羽田な！！沖縄っ娘（コ）をナンパナンパ！がっはっはっは！」
滋は毎度のことながら、強引にそして一方的に修吾との沖縄ナンパ旅行を決めてしまい、
そのことを伝えると自分はサッサとロビーを出てしまった。
修吾はその後を慌てて追いかけ、どこかへ行こうというのか速歩きする滋の背中に向かって
「お、おい！俺は沖縄なんて！お前マジでいい加減にしろ！勝手に！！俺は行かないからな！絶対行かないからな！！」
と眉間にシワを寄せながら文句を叩きつけた。
しかしそんな修吾の言葉など、どこ吹く風の滋は・・・

「じゃあさ、俺、旅行の買い物があるから先に行くぞ！寝坊して遅れんなよ！！じゃあな！明日！６時だぞ、６時！！」
というと、背中を向けたまま手を振りながら飛び跳ねるようにして、修吾を振り切るとあっという間に雑踏の中に消えてしまった。
「ったく・・・信じられねー勝手なヤツだな・・・しかし。」
そうつぶやきながら修吾は、やっとゆっくり休めると思っていたせっかくの夏休みまで、滋に憑かれてしまったことに肩を落とし、首をかしげながらトボトボと家路についた。

会社から修吾の自宅までは、電車を数回乗り継ぎ1時間半はかかる。やっと辿り着く頃には、日もほぼ落ちていて帰路途中の民家の灯りがぽつぽつと点き始める。そんな東京都下にあるワンルームマンションが修吾の現在の住まいである。
入り口にある集合ポストからはみ出たチラシを歩きながら押し込み、そのすぐ横にある階段を棒のようになった重い足で力無く昇っていく。

薄暗い階段の蛍光灯には虫が集っている。
大人になると虫と戯れる機会が少なくなるせいか、修吾は大の虫嫌いになっていた。
蛍光灯の周りを不規則な軌道で狂ったように飛び回る蛾の様子に鳥肌を立てながら、修吾は頭を低くし階段を駆け上り自分の部屋の前でひと息つく。
昼間かいた汗が乾ききっていないジメっとしたスーツズボンのポケットからキーを取り出して鍵を回した。
そしてゆっくりとドアを開けると、若干ではあるが日が落ちて気温の下がった外気と比べて、明らかに温度が高い蒸れた空気が修吾の顔を覆った。
「うわ・・・。」
修吾は、顔をそむけ一度ドアを閉じた。

「はぁ・・・。」
再度ひと息つくと、やはりうな垂れながら部屋に入った。
真っ暗な玄関は、夕べ食べたコンビニ弁当の毎回残すエビ天の匂いがたち込めている。
玄関の灯りは点けずに部屋へ上がり、留守電のランプの点滅を横目に見ながら、それを無視してカバンをソファーに投げ出した。部屋の灯りさえ点けるのもおっくうなほど疲れきっていた修吾は手探りでエアコンのリモコンを探して、スイッチを入れるとスーツ姿のままベッドに倒れ込んだ。

タイマー録画をセットしておいたビデオデッキのテープが回る音を聞きながらうつぶせのまま目を閉じた。

そして、
「明日の荷造りをしなくちゃな・・・」
そう思いながらも、残業続きで酷使した体は押し寄せる強烈な睡魔に勝てず、抵抗空しく深い眠りに吸い込まれていった・・・。

・・・ジジジジ・・・ミーンミンミンミン・・・。
「エッチャンバヤシに行こ！」
「うん、ちょっと待ってて」
「あっノコ！」
「ほら～」
「いいなぁ」
「・・・早く帰ろ。」
キキーーーッ！！
「ご、ごめん・・・なさい・・・。」
「ううん、私は大丈夫。」
「またね。」

修吾は何年振りかにあの夢を見た。

そして・・・平成二年八月三日　早朝四時四十五分

第4話

「・・・ん・・・ん？もう朝・・・？久々に・・・見たな・・・あの夢。」
ソファーの生地の痕がビッチリとついてしまった顔をゆっくりと上げて、出窓の方に顔を向けた。うっすら夜が明けていることを確認できる。
次第に意識がはっきりしてくると同時に、滋の怒った顔がクレッシェンドして頭の中のスクリーンに浮かんでくる。
そして、滋の顔がそのスクリーンから消え、「！マーク」でいっぱいになった時、初めてその状況に気が付く。そんな修吾にはお構いなく、出窓の上の壁掛け時計は1分、また1分と無情に時間を刻んでゆく。朝寝坊をした時の時計ほど、無表情で事務的で薄情者に写るモノはない。
「・・・ん？・・・んんーーーー？やっべー！！もうこんな時間じゃん！！間に合わねーーーっ！」
修吾は遠足の日に寝坊した小学生のように飛び起きた。足元に転がっている脱ぎ散らかしを踏みながら洗面台に向かい、こだわって使い続けている粉末のタバコライオンで乱暴に歯を磨いた。そして、水で顔を軽くこするだけの簡単な洗顔を済まると、沖縄の海で穿くにはかなり恥ずかしいカンジの競泳用のモッコリタイプ海パンを手にし、
「・・・沖縄でこれかよ。」
と、思いつつ、仕方なくバッグにねじ込んだ。実はこの海パン、『体を鍛えてるオトコっていいよね』という会社の女の子たちの話題を鵜呑みにしてその気になり、通い始めたはいいが、結局長続きしないままたった1ヶ月でやめてしまったスポーツジムの販売コーナーで買ったものである。
なんとか準備が整った（？）修吾は荒れ放題の部屋をそのままに、

慌てて羽田空港へ向かった。

　そんなワケでようやく羽田空港に到着したのは六時十五分過ぎ。結局何の用意する時間も無く、例のモッコリタイプ海パンしか入っていない旅行バッグを振り回しながら、すでに人ごみが出来上がっている空港ロビーを見渡すと大きく一つ息をした。そして、その隙間を起用にすり抜け、時折突然目の前に現れる子供の頭を撫ぜながら修吾は待ち合わせ場所めがけて駆け抜けた。
するとチェックインカウンターの前でイライラした表情を浮かべ、ストレスの溜まった可哀想な動物園の動物達のように行ったり来たりしている滋の姿が目に入った。ちなみにこの可哀想な行動は「常動行動」と呼ばれ、極度のストレス状態に陥った時に起こす行動のことを言うらしい。
「ごめんごめん！メンゴメンゴ！」
と、旅行バッグで顔を隠しヘラヘラしながら謝る修吾に向かって前のめりでツカツカとガブリ寄ってきた滋は、
「てっめー！ふざけんなよ！乗れなかったら中止になるトコだぞ！今日あたりはキャンセル待ちなんかしたって絶対キャンセル出ないからな！」
と、いつもより激しくかなりマジな顔で怒っていた。
「早くチェックイン済ませろよ！搭乗が始まってるぞ！ったく！！」
この二人の到着を待たされた他の乗客たちからの冷たい視線を感じながら頭をヘコヘコさしながら、息も切れ切れに席へ着く。そしてほっと一息つきながら前方に目を向けると、スチュワーデスが飛行機のドアを閉じロックをかけた。本当に最後の二人の上、離陸ギリギリだったようだ・・・。
「間もなく離陸いたします。頭上にございますサインが消えるまでシートベルトをしっかりとお締め下さい。」
機内アナウンスが流れ、飛行機が加速していく。
すると滋のすぐ横でなにやら唸り声がする。

「うううう・・・。うううーーーーっ！」
修吾は、飛行機が苦手なのである。
「こ、これ・・・このカンジ・・・ヤダよね・・・なんつうか、腰の力が抜けてエレベーターが動く瞬間みたいのがずーっと続くこのカンジ・・・ヤダよね・・・。」
その姿を見て滋は、
「知らん！ヒヤヒヤさせやがって！勝手に怯えてろ！沖縄に着くまでそうやって怯えてろ！」
と言い放った。
が、言い放った後で窓の方に顔を向けクスクスと笑っていた。
修吾は滋のその表情を覗き込むように窺うと、本当に怒っているのではないということを見て取った。怒りが通り過ぎたのを確認すると修吾は、そう言い放った滋の後頭部を軽く小突いた。
　飛行機が自動操縦に入り機体が安定した頃、ようやくその恐怖から開放され、落ち着いた修吾が思い出したように話を始めた。
「あのさ、俺達がまだ入社し立ての頃にお互いのことを色々話しただろ。そのとき子供の頃に良く見た夢の話したのって…覚えてる？」
滋は、機内で配られたお茶菓子の包み紙を乱暴に破くと、それを口に放り込みながら答えた。
「ああ、例のあの話ね。クワガタ採りに行った帰りに自転車でおねえさんにぶつかりそうになったって・・・アレか？」
同じくお茶菓子を頬張り、それをお茶で流し込むと、修吾は大きく頷きながら
「そうそう、それそれ。久々に見たんだよ、相変わらずそのおねえさんの顔はハッキリしないんだけどさ。・・・なんだか、前より更にぼやけてた気がしたんだよなぁ・・・。」
と言いながら滋の方に目をやると、聞き飽きた話題が退屈だったのか滋は口を開けて熟睡していた。
「・・・信じらんねー・・・一瞬で熟睡かよ」
この旅の唯一の話し相手がいなくなり、手持ち無沙汰の修吾は、不

服そうなため息を鼻から噴出すと、見たくもない航空会社発行の冊子を取り出しパラパラっと流し読みをした。

そして、東京を発ってから二時間近く経っただろうか・・・。
大口を開けて寝ている滋越しに、窓の外を見ると、そこは真っ青な沖縄の海が広がっていた。
「おおお！もう沖縄に着いたのかぁ！おい！
おいってば！もう着くぞ！起きろよ！」
修吾は滋の肩を掴み揺さぶり起こした。
首がすわっていない赤ん坊が揺さぶられているかの様に首をグラグラさせながら、
「・・・ふぁ・・・沖縄って？」
と、完全に寝ぼけている滋が答えた。
「なに寝ぼけてんだよ！外！見てみろよ！窓の外！」
押し付け旅行だったことなどすっかり忘れてしまっている修吾が、爛々とした目でそういうと滋は、まぶしそうに片目をつぶり、伸びをしながら窓の外に目を向けた。
「おおおおおおお！海だ海だ！！沖縄の海だ！ナンパナンパ！沖縄ギャルが呼んでるよぉ！！」
と、またもや一瞬で沖縄モードに入った。
「おい！声が大きいって！・・・ったく、マジで・・・はぁ・・・。」
大声で騒ぎ立てる滋を、まるで暴れる猛獣を押さえ込む調教師のように、両手で押さえながらバツの悪そうな顔で隣の人に何度も頭を下げる修吾だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3834d/

あなたに逢いたくて

2010年11月18日14時29分発行